

松阪撫子 (Matsusaka Dianthus)

2016(平成28)年 5月
松阪三珍花保存会

● 松阪撫子(なでしこ)の歴史

松阪撫子(Matsusaka Dianthus)は、一般には伊勢撫子と呼ばれ、薩摩撫子、御所撫子、糸垂れ撫子ともいわれるようです。松阪撫子の起源は江戸時代後期(1830年頃)松坂殿町に住んでいた紀州藩士・継松栄二(1803~1866)が河原撫子を栽培中、偶然にも花卉の深く切れて長いものを発見し、その後実生により改良を加えた結果、松阪撫子を作出したと伝えられています。その後養子の継松静、野口才吉、中瀬常吉、長林堅三郎、服部栄次郎、岡村金蔵などに受け継がれ、1971(昭和46)年に岡村らの指導の下で松阪三珍花保存会が発足し、栽培・保存活動に努めて現在に至っています。

特に殿町生まれの野口才吉(1829~1910)は、花き栽培の熱心家で松阪三品(松阪菊、松阪花菖蒲、松阪撫子)の愛培研究家として活躍し、継松栄二より譲り受けた松阪撫子の良種保存と優良種の育成を行い、門外不出としたようです。その後、花岡村の中瀬常吉(1866~1947)に渡りましたが、中瀬は少数の者で楽しむよりは大勢で楽しみ、又広く世に広めたいと思い、種子・苗を希望者に譲ったとの事です。その後明治の中頃より、津市の百華園主により種子および苗の取り次ぎ販売がされた事があり、また大正時代には東京市上野の堂本氏により米国までも輸出された記録があるようです。

1932(昭和7)年10月28日の大阪毎日新聞によれば、『花三題』珍種=松阪三品の再興運動に三氏が一致協力努力しているとして、松阪花卉園芸組合の組合長服部栄次郎(1885~1956)、県立飯南農学校教諭岡村金蔵(1903~1976)、園芸家長林堅三郎(1876~1937)が紹介されています。特に新座町に生まれた長林は、極めて熱心な松阪三品の栽培家・研究家であったと伝えられています。

戦後、三重大の富野博士らにより本種の紹介や研究が精力的になされ、1952(昭和27)年に三重県教育委員会により松阪撫子は、松阪花菖蒲・松阪菊とともに天然記念物に指定されました。

一方、第119代光格天皇(1771~1840)に献上された本種は、現在でも宝鏡寺で栽培されているとの事です。また、戦後加茂花菖蒲園(静岡県掛川市)では、当保存会などの苗や種子を用いてコルヒチン処理による倍数体育種により品種改良を行い、展示・販売を行っていたようですが、現在は細々と保存のみとの事です。当地でも新町桜屋橋、クラギの種子販売カタログが残っており、当保存会より岡山県立農業試験場やその他への種子譲渡の記録があります。その後どのような経路・栽培によるかは不明ですが、現在でも伊勢撫子の名前で本種の苗が全国の園芸店で販売されています。

● 松阪撫子(なでしこ)の性状・特徴・仕立て方

松阪撫子は同じナデシコ科に属するセキチク(石竹)と縁が深く、園芸的に改良されたものの、その祖先や起源については明確ではなく、1種の原因からの改良ではないとも言われています。

茎は50cm内外に伸び、葉は細長く斜めに開き、膨らむ節を包囲し分枝し、茎葉ともに少し白粉を帯びるものが多いです。花は四季咲性ですが、保存会では9月中旬頃播種の5月咲きとしています。花は花卉が深く分裂して裂片は細長く糸のように垂れ下がります。松阪撫子は花卉の性質によりいくつかの系統があります。①花卉の肩が張らずに垂れるもの、②花卉の肩が張って垂れるもの、③花卉が極めて縮むもの、④花卉の幅が広いものなどがありますが、何れも垂れ下がりが長いものほどよいとされます。花色は濃紅・赤・桃・黄紫・白などがあり、それぞれに絞りの花があります。

仕立て方は3本仕立ての天地人作りとし、1本に5花、計15花を基本とします。